人生の着陸の操縦法をどう学びますか？

先日、３０年程前に数年共に働いた元同僚（元看護師：享年８３才）の告別式に参列した。晩年は体調不良もあり特別養護老人病院に入院されていた。ご主人を早く亡くされ、お子さん達家族も遠方に住まわれ、人生の後半は一人住まいであったこともあり、入院してからは、我々は時々面会に行くことを心がけた。

こうした事情からか、告別式の参列者は２０数名で、ご親族以外は我々３人だけ……。

面会の折も、「まだ、性懲りなく生きてる……」と呟いていたのを思い出す。ご本人も晩年はいかばかり寂しい日々であったか……。入院、入所中のご高齢者の「早く逝きたいが……」の言葉をしばしば耳にする。

世の中、長生きすることがいいことのように云われているが、こうした高齢者の晩年の現実を目にすると、はたしてご家族、地域から離れて高齢者用施設に入院、または入所し長生きすることが、ご本人はどういう心境の日々であるのだろうか。それが本当にいいことなのかどうか解らなくなってきた。何ともやるせない気持ち……。

誕生という人生への離陸には、産婦人科医、看護師、助産師が援助してくれる。

一方、死という人生の着陸は、誰の援助もなく自分で操縦してなくてはならない。錐揉み状態で墜落するのか、ダッチロールを繰り返しての着陸か、滑走路を探しあぐねて手前に着陸か、はたまたオーバーランか。やはり滑らかに着陸し、駐機スポットに着きたいものである。

また、いつ出会うかどうかも不確かな地震への準備や訓練は行われるのに、誰にも確実な死をどう受け止めるかの準備や訓練はしていない。言い換えれば、着陸の操縦法の準備は誰も教えてくれていなし、自分を含め殆どの人は学ぼうともしていないのではないだろうか。

がんの方々への緩和ケア活動のお手伝いをしているが、高齢者の死への緩和ケアもあっていいのでないかとふと思った（着陸の操縦法に「緩和ケア」という言葉が適切かどうか、今は解らないが……）。

誕生の瞬間も一人、死の瞬間も一人。人生はその間の「心の旅（神谷美恵子著書）」。ならこそ、その間に偶然に出会う人々との交わり、係わり合いのその一時を、大事に、かつ共に賑やかに歩みたいとは思っていはいるが……。

（2004 年 12 月 17 日　記）